

民俗信仰における「救済」について

渡 邊 秀 司

要 旨

人間が今まで営んできた宗教生活において、「救い」と言う要素は重要な部分を占めている。この小論においては、民俗信仰における「救い」とはどういう要素を内包するものであるのか、そのことについて考えていくための端緒となるものである。まずは、「救い」と言う宗教生活の1要素のなかから、「癒し」という局面について論じられていることについて概観する。次に、島蘭進が論じている新新宗教の持つ特質について概観する。最後にこれまで概観してきたことをふまえながら、「救い」とは主体的な局面を強く持つものなのではないか、と考えていく。

キーワード：救い、癒し、「空しさ」の動機、こころ

「悩み」から始まること

人間は、日々の生活を送る中で「悩み」というものが必ずその人の目前にあらわれる。悩みとは「なやむこと、苦しみ、思いわずらい」という心の持ちようから生じてくる悩みと「やまい、病気、わずらい」という身体的なものから生まれてくる悩みがある。悩みと一口で言ってみても個人個人でその悩みの質は違う。例えば、身体的な悩み、経済的な悩みなど。また、社会構造そのものの歪みから、その結果として悩みが生じてくることもあるかもしれない。様々な社会的な差別は、社会構造の歪みから生まれてくる不幸であろう。それらの悩みを比較して、悩みの大小を決めることは難しい。悩みとは、ある悩みを持つ個人を起点とした、主観的なものになるか、より大きな社会構造の中から生じてくるものか、そのどちらかであろう。悩みは人間が社会生活を営む能力を得たときから、つきまとう。この事は逃れようのないことではなかろうか。社会とかかわるなかでさまざまな葛藤に出会い、そしてその葛藤とのつき合い方を

覚えていくまで、人間は、その葛藤に苦しむことになる。悩みとは、人間が直面する困難を総称して、そう語るものなのだろう。

人間の力ではどうにもならない困難に直面したとき、人間は、人間を越えた力に対してすがるときがある。それが、宗教生活における「救い」の構造の一面ではなかろうか。宗教にとって、人間の救済は重要なテーマである。それがなければ宗教としての意味は半減してしまうだろう。ただ、何に対しての救済か、ということはその時代背景などの影響を受けつつ変化していく。旧来から言われていた「救い」のテーマは生・老・病・死というものである。人間にとって生きることそのものが悩みであり、その悩みを緩和していくことが、旧来の宗教が果たしてきた「救い」であった。しかし、こうした問題は徐々に宗教から離れていくようである。生きていくこと、病を得ること、老いて死んでいくことは、現代に生きる我々の中では大きな悩みになっているのかどうか疑問である。そうあるものと思っているだけかもしれない。そうした従来からの救いがどう変化していったのか、そしてこれからどのように変化していくのか、そ

の事についてこの小論では考えていこうと思う。その際の視点として、俗信と呼ばれているような民俗信仰、言い方を変えるならば、定型化できない基層信仰と呼ばれるものを考えていきたい。特に日本の宗教生活を語る上では、この基層信仰を無視することは出来ないだろう。

とは言え、新宗教と呼ばれる江戸後期以降に成立した宗教や、戦後から七〇年代以降に成立した新新宗教まで、いわゆる新興宗教といわれる宗教団体が、直接的には「救い」を行ってきた事は事実であるし、その事も無視はできない。これから論を進めていくうえで、そうした新興宗教が行ってきた、もう少し具体的な救いである「癒し」の研究と、現在の新興宗教についての研究をまずは概観してみたい。「癒し」という行為は、宗教が人間を苦しみから救い出す手段として機能しているだろうと考えられる。特に宗教とは関係ない分野においても「いやし」という言葉が用いられているし、むしろ最近では宗教とは関わりのない部分で「いやし」ということがよく言われていたりする。しかし、ここではそうした広い意味での「いやし」も考慮しながら、宗教生活の中で行われてきた「癒し」について考えていきたい。宗教生活の中での「癒す」という行為はどういうものであるのか、その事についてまずは考えてみたい。

「心」の哲学から「霊」の哲学へ

—その「癒し」について—

ここでは「救済」と言うことについて、私自身がこれから考えていくための端緒となるものを論じていくわけであるが、まずは、宗教生活において「癒し」とはどの様にとらえていくべきか、「救済」ということを考える場合の方向性、これから論じていくことの前提となることについて、まずは考えてみよう。

「癒し」とはどのようなものであるのか。弓山達也らによる『癒しを生きた人々—近代知のオ

ルタナティブ』(以下『癒し』論文)によると、「癒し」とは合理・近代・科学を見据えながら、非合理・伝統・宗教への安直な回帰を拒む際の、もう一つの道であり、近代西洋医学とも伝統的な病気治しとも違う、病「癒し」の道だという。¹⁾ つまりは人間の病気に関わることでありながら、従来にはない新たな方法を模索する中での「癒し」というひとつの選択肢である。この論は、開国以来西洋近代の知性が流入し、伝統的な生き方を見直し、新たな生き方を模索していこうという営みのなかで行なわれてきたこと、つまり近代に対するオルタナティブな知²⁾を考えていこうとする流れの中で行なわれてきたのだと言う前提がある。ここでは『癒し』論文の中の一節にある、弓山達也が論じた大本教の「霊」の思想に関する論文を主に概観する。

幕末維新时期に形成された新宗教や、それ以前の信仰集団の特徴として考えられることなのであるが、安丸良夫によれば、心の可能性の追求を「心」の哲学と呼んでいた。安丸はその著作の中で「民衆の諸思想の展開過程は、まず何よりも人間の精神の力と可能性に対する驚くべき信念が、広汎な人々のうちにはじめてめざめたことにあった」と言い、³⁾ 勤勉、儉約、孝行などの通俗道徳の実現という形態をとる、自己変革の可能性を模索するものであった。こうした、「唯心論的」な考え方による他者の救済を志向する背景があり、『癒し』論文では心の教説として、この事を説明している。その心の教説とは、安丸が述べているような通俗道徳を実践することによって、そうした徳目を内面化させ、共同体に埋没している個のあり方から、弛まぬ自己形成・自己鍛錬による強靱な精神力を持った人格を作り出した。しかも、通俗道徳の実践によって貧困、病気、争いの連鎖的な輪を断ち切り、ある程度の富や健康、良好な人間関係を約束するものだったのだろうとしている。⁴⁾

『癒し』論文では、こうした心の教説から、大本にいたって「霊」の教説へとシフトしていっ

たとしている。大本教の「霊」の哲学とは、大本の鎮魂帰神を通して得られる霊や霊界の存在への確信、そして現実の諸現象を霊の働きや霊界の反映としてみようとする世界観を言う。こうした世界観へのウェイトの重視がどういう背景で行われていったのか。第1に、問題を解決していくという点においては、「心」の哲学とそれ程の変わりはないが、当時の社会状況から見て、その方法論が人格的な信頼関係の基盤の上に成り立つ「心」の哲学に比べて、成立しつつあった大衆社会に即したものであったという点、第2に鎮魂帰神の背景にある「霊」の哲学が病氣直しの教義的な背景としてだけでなく、近代に合致した性格、近代知に対抗的なのだけではなく、補完的でもあるオルタナティブな癒しの一端を担っていたこと、第3に「霊」の哲学には「心」の哲学と異なる擬似科学的な性格をおびていたことがあるのではないかと3つの理由をあげている。⁵⁾

ここでは、幕末維新时期に成立した「心」の哲学に基づく救済観から、「霊」の哲学による救済の方法への変化のダイナミズムについて興味深い論考を行っている。この論文からは守ることによって救済が得られる、という「心」の哲学の考え方から、行うことによって救済が得られるという、「霊」の哲学に依拠した、より能動的な救済方法を志向するようになった、ということがいえるのでは、と論を進めている。つまり、救済を得るための方法のダイナミズムが、大本の鎮魂帰神法にも窺えるということである。こうした「霊」の哲学からさらに新たな展開をし、信者を集めていったのが戦後70年代以降に成立した、新新宗教ではないか。この新新宗教については、島藺進がより興味深い考察をおこなっている。次に、島藺の説について概観してみよう。

新新宗教の「救い」の形

島藺はさまざまな論文で宗教現象について論じているが、この論文では新新宗教の世界観について概括しているものを中心に提起し、概観してみたい。その前に、新新宗教とは何を指して述べているのか、その点について簡単に述べるなら、戦後以降、新しさを感じさせなくなってきていた「新宗教」とは違う新たな展開を提示した新興宗教のことである。ここではこれ以上詳しくは述べないが、こうした新たな展開はどういったものであるのか、それについてこれから述べようとおもう。

島藺は、新新宗教は多様なものであるとしながらも、いくつかの特徴を述べている。第一に、「貧病争」という動機から「空しさ」の動機へと変化していったと言うことである。外見的には満ち足りていても、内面的に満たされないものがありそれを満たしてくれるのである。常に深い孤独感や不安、倦怠感があり、それを解消するための営みがあるのだという。第二に現世志向から現世離脱へと変化していったと言うことである。島藺が言う「旧」新宗教、例えば天理教、金光教などがそれであるが、現世志向的でどちらかと言えば楽天的な志向に対して、新新宗教では現世から離脱することや、現世外の霊的世界での生に高い価値をおこうとする。さまざまな事例をあげた上で、「現世の悪が強調されるか、現世のはかなさが強調されるかの違いはあるが、統一教会の場合も、初期GLAや幸福の科学の場合にも、今生きているこの人生の価値がときに低く見られていることは共通している」⁶⁾ といっている。第3に心なおしの実践が弱まり心理統御技法の増加が見られるという。自らの心を制御し、より良い状態に保とうとする、心の「明るさ」の追求であると言える。第4に神秘現象と心身変容への関心の増大をあげている。ただ、ここで言う神秘現象への態度

が重要で、神秘を通して生活が改善されるというのではなく、神秘そのものの意義が強いのだという。神秘的な力を得て、ある確信を得ることで気力や精神力を充実させることこそ重要だというのである。第5に自己責任の重視が見られる。元来新宗教には自己責任を求めていく特徴があるが、新新宗教においてはさらにその性格が強まったのだという。第7の特徴として、破局切迫の意識とメシアニズムの昂揚という点があげられる。これは70年代以降特に目立った特徴としてあげられている。

島藪の論の中から、島藪自身が言うところの新新宗教と、「救い」という点にかかわる特徴を述べてみた。新新宗教においては個人の内面で追求される心身変容や靈魂の自覚に重点が置かれるという点、「空しさ」の感情が漂っていると、島藪は言う。こうした特徴を持つ新新宗教が、これからいかなる信仰世界を広げていくのか、という問いかけを島藪は投げかけている。

民俗信仰における「救い」を求めて

「救い」という宗教生活における大きな要素を考えるための整理を、先行研究を概観すると言うことで試みてきた。では、民俗信仰において「救い」とはいかにして得られるのか、「救い」を得る方法はいかなるものであるのか。

幕末から明治にかけて成立した宗教などは、「心のありかた」を重視していた。例をあげるなら、宗教というわけではないが、富士講の行者である食行身禄は「生れ増」という概念を持ちだし、救済の教説を展開した。食行は既存の宗教にある概念などを取り入れながらも、自らの教説を展開し、数多くある山岳信仰の一つに過ぎなかった富士講に、新たな方向性を示した人であったが、彼の言う「生れ増」ということを端的に述べるなら、父母への孝行、主君への忠節、自らの職分が果たすべき事をまじめに果たすこと、などといった徳目を実践することに

よって、より良い生を得ることが出来る、ということである。⁷⁾

富士講という山岳信仰の行者である、食行身禄が志向した「救い」は、こころの持ちようでは生活は改善して行くし、幸せな人生を送ることができるという「こころ」による救いであった。身禄以前から日常的に行われていた、超越した神の力を受け入れることによって得られる受動的な救いに比べれば、より能動的な主体性を持った「救い」を身禄は志向している。しかし、世界の変革まで彼が志向することはなかった。あるがままの世界を受け入れた上での自己改革であって、革命的ではなかった。しかし、時代を経て自己改革から世界の変革をなすことによって、「救い」を得ることが出来るという志向に変化していったのではないかと考えられはしないだろうか。「霊」の哲学の自己変革が世界の有り様まで思いをこらすものであることであったり、新新宗教のメシア願望的性格など、「救い」のダイナミズムは変化しているのではないかと。この点は、より深く考察していかなければならない。

《主要文献》

- 田邊信太郎・島藪進・弓山達也編『癒しを生きた人々—近代知のオルタナティブ』専修大学出版局 1999年
 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』平凡社ライブラリー 1999年
 島藪 進『ポストモダンの新宗教 現代日本の精神状況の底流』東京堂出版 2001年
 島藪 進『精神世界のゆくえ—現代世界と新靈性運動』東京堂出版 1996年

注

- 1) 田邊信太郎・島藪進・弓山達也編『癒しを生きた人々—近代知のオルタナティブ』専修大学出版局 1999年 p269
- 2) オルタナティブな知という言葉は、前出の論文にある言葉で、この言葉はキーとなる概念であると、編者は述べている。
- 3) 安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』平凡社ライブラリー 1999年 p22
- 4) 『癒し』p96-97

- 5) 同上 p122-124
- 6) 島藺進『ポストモダンの新宗教 現代日本の精神状況の底流』東京堂出版 2001年 p46
- 7) 富士講の研究に際しては、岩科小一郎、井野邊茂雄といった研究者が、膨大な業績を残している。私自身が富士講の研究を行う際に、以下の論文も参考にさせてもらった。岩科小一郎

『富士講の歴史 江戸庶民の山岳信仰』名著出版
1983年、井野邊茂雄『富士の信仰』古今書院
1928年（名著出版から復刊 1983年）、など。

（わたなべしゅうじ

佛教学大学院社会学研究科博士課程）